

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長



平和記念式典で「平和への誓い」を読み上げるこども代表（写真提供 広島市）

目次

写真「平和への誓い」（こども代表）……………	①	平和首長会議インターンシップ／ユースピースボランティアの活動……………	⑥
「2045年の核兵器禁止に向けて」（エレイン・ホワイト・ゴメス）……………	②	高校生たちが被爆体験を絵に描く／	
被爆79年 平和記念式典／ヒロシマ青少年平和の集い……………	③	祈念館・資料館共同特別展「広島市の救護に立て 暁部隊最後の任務」…	⑦
ひろしま子ども平和の集い……………	④	資料館企画展「新着資料展」／国際交流員が着任／	
NPT再検討会議準備委員会に平和首長会議代表団を派遣……………	⑤	ヒロシマ・メッセンジャー募集!……………	⑧





2045年の核兵器禁止に向けて

エレイン・ホワイト・ゴメス
ジョンズ・ホプキンス大学
高等国際関係大学院教授

〔エレイン・ホワイト・ゴメス〕

2014年から2020年まで、国連ジュネーブ事務所のコスタリカ常駐代表(大使)。2017年、核兵器禁止条約(TPNW)を交渉し採択した国連会議の議長を務めた。

核兵器の法的禁止を交渉するという任務を負った国連外交会議で議長を務めたことは、コスタリカの外交官として、また世界市民として、私の人生で最も大きな栄誉の一つでした。そして、この会議は、成功裏にその大きな責務を果たしました。画期的成果である核兵器禁止条約が、核時代が始まってから72年後の2017年に誕生したのです。

この条約は、世界中の様々な人々や各種団体による数十年にわたる粘り強い訴えの成果であり、また、手続的、制度的、概念的、そして政治的な枠組みについて粘り強く交渉し、核兵器を法的に禁止するために必要な道筋をつけ、政治的な連携を築き上げてきた外交官たちの不断の努力の結晶です。こうした結果が得られたのは、戦略的ビジョン、勇気、そして核時代の政治指導者と被爆者の政治的知恵があったからこそです。この会議は、その歴史的、制度的な意義だけでなく、関わりを持った全ての人々にとって人生感を変える経験となり、これからも私たちの心に深く刻まれ続けるでしょう。

最も意義深い成果は、2017年7月7日、国連ビルの会議室1で達成されました。この日、核兵器の使用、生産、実験の被害者たちは歴史的な瞬間に立ち会いました。国際社会の圧倒的多数が、核の恐怖を断固として拒否する票を投じたのです。この圧倒的支持は、核政策の根本的な転換を求め、いかなる状況下でも核兵器が二度と使用されないことを保障する唯一の方法として、核兵器の完全な廃絶を訴えるものでした。

様々な世代や経歴を持つ人々が、核兵器の法的禁止は、犠牲者のために正義をなす行為であり、核の脅威のない世界を実現するための予防策であるという信念の下に団結しました。私たちは、被爆者／被爆者たちが、ついに国際社会から正義、認知、そして特別な支援の必要性の認識を得るのを見て、歓喜しました。

この画期的出来事を実現する上で、被爆者、広島そして長崎は、人類の脆弱性と強さを示す生き証人となりました。私自身も、2017年に広島と長崎を訪れたことが、核兵器による人的犠牲についての理解に深い影響を与えました。計り知れない苦しみにもかかわらず、生活や地域社会を再建した被爆者たちの不屈の力を目の当たりにし、私はこの使命を果たさないわけにはいかないと強く感じました。長崎市長は、被爆者がこれ以上亡くなる前に核兵器の法的禁止を達成することの緊急性を伝えてほしいと強く求めました。そして私はそうしたのです。

外交官、科学者、平和主義者、人道支援活動家、法律家、NGO、そして数え切れないほどの人々が、核兵器に関する世界的な対話において新たなパラダイム

を求めたとき、被爆者と広島・長崎両市は、その最前線に立ち、核兵器が人間、環境、社会経済構造に及ぼす壊滅的な影響の直接的な証拠を示してきました。彼らの揺るぎない訴えは、核兵器はいかなる状況下でも二度と使用されるべきではなく、廃絶されなければならないという強い信念と確信を形成する上で、極めて重要な役割を果たしました。

広島と長崎は、より良く、より公正で安全な世界をつくるという夢を決して諦めず、弛まぬ努力を続け、そのビジョンを行動、言葉、そして日々の忍耐を通じて伝えてきました。

2020年、世界が新型コロナウイルス感染症と闘う中、国連は創設75周年を迎えました。来し方を反芻すべきこの機会には、過去70年間に起こった劇的な変化を浮き彫りにし、国連はグローバルガバナンスへのアプローチを再評価することとなりました。

成功と失敗の両方から得られた教訓を踏まえ、2024年9月に開催される未来サミットは、世界の指導者たちが国際協力のための新たなロードマップに合意するためのプラットフォームとなるでしょう。これには、安全保障、軍備管理、軍縮への取組の再確認も含まれます。

これ以上ないほど完璧なタイミングです。核兵器禁止条約第一回締約国会議(MSP)で分析された科学的研究によれば、核兵器の廃絶は、たとえ最大の核保有国であっても、10年以内に達成可能です。第一回MSPでは、科学と証拠に基づいて、この判断がなされました。

しかし、現状に鑑みますと、希望を持つのは難しい状況にあります。軍備の増強・支出はかつてないレベルに達し、核兵器は近代化と改良が進められ、ロシアの核の脅威や、安全保障のために戦争準備を優先する言説によって、国際法の規範的枠組みと核のタブーが蝕まれています。激化する大国間の競争と悪化する安全保障環境は、世界のすべての市民と国家にとって、深刻な懸念材料となっています。

今こそ、私たちが強さ、ビジョン、インスピレーションを見出さなければならない時です。私たちは抜本的に方向転換をする必要があり、人類にはそれを実行する能力があります。

この観点からは、2010年に赤十字国際委員会総裁がジュネーブの国連で「…核兵器の存在は、さまざまな問題について最も深刻な問いを投げかけています。どの時点をもって、国家の主権でなく人類の利益が優先されるべきなのか。人類は自ら作り出した技術を使いこなす能力があるのか。…^(*)」と述べています。同様に、2017年3月27日にフランシスコ教皇が交渉会議に寄せたメッセージでは、人類は“技術を主導・管理

し、自らの権力に制限を設け、これらすべてを別の種類の進歩、すなわち、より人間的、社会的で、統合的な進歩、したがって構造的平和にさらに資する進歩に役立てる自由、知性、能力を持っている”という信念が強調されました。

このように、決定論にとらわれるのではなく、人間の主体性こそが、世界的対話の指針となるべきです。安全保障、平和、軍縮に関する21世紀の議論を形作

る上で、人類の脆弱性と回復力の象徴である広島と長崎は、核兵器の甚大な影響を永遠に思い起こさせる存在です。核時代 100 周年となる 2045 年が近づく中、被爆者の思いを引き継ぐこの二つの都市が、核兵器が人間と環境にもたらす壊滅的な影響という厳しい現実を踏まえ、安全保障と核軍縮に関する世界的対話を主導することを期待しています。(2024年8月)

(※) 翻訳出典：赤十字国際レビュー第97巻 (899号)

被爆79年 平和記念式典

8月6日、平和記念式典が開催され、被爆者や遺族などおよそ5万人が犠牲者の冥福と世界恒久平和を祈りました。

松井一實^{まつい かずみ}広島市長による平和宣言では、「為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できる。」とし、「先人たちと同様に決意し、希望を胸に心を一つに行動」を起こせば、「核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはず。」と訴えました。また、「平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和の醸成に一層取り組んでいく。」と宣言しました。さらに、平和意識の高まりを反映し、過去最多となった平和記念資料館の入館者数に触れ、特に次代を担う若い世代の皆さんに、広島



平和宣言を読み上げる松井市長
(写真提供 広島市)

を訪れ、「希望の輪」を広げてほしいと訴えました。日本政府に対しては、核兵器禁止条約にオブザーバー参加することと締約国となることを求めました。

この後の「あいさつ」で、岸田文雄^{きしだ ふみお}内閣総理大臣は、「核兵器のない世界の実現に向けて努力を着実に積み重ねていくことは、唯一の戦争被爆国であるわが国の使命」とされ、「被爆者の方々を始め、核兵器のない世界の実現を願う人々と共に、被爆者の方々の思いや被爆の実相を次世代に継承するため、引き続き、力を尽くしていく決意です。」と述べられました。

今回の式典では、アントニオ・グテーレス^{あなとうにょ ぐてーれす}国連事務総長の「あいさつ」を、中満 泉^{なかつみ いずみ}国連事務次長兼軍縮担当上級代表が代読しました。事務総長は、「かつて、私たちを軍縮と平和に向け、集団的な努力に導いた広島島の教訓が、今や隅に追いやられつつある。」「1945年の惨事から学んだ教訓を、活かし続けなくてはならないと、痛感してる。」とされ、その教訓は、「核兵器のいかなる使用も、壊滅的な人道的結末をもたらすということ」「核兵器の脅威をなくす唯一の道は、核兵器の完全な廃絶であるということ」などであると述べられました。

また、湯崎英彦^{ゆざき ひでこ}広島県知事は、核兵器は存在する限り必ずいつか再び使われることになり、「人類存続に関わる差し迫った現実の問題である。」と訴えられ、核兵器廃絶を本当に実現するには、知的、人的、財政的資源などを思い切って投入することが必要であると主張されました。

こども代表の加藤晶^{かとう あきら}さんと石丸優斗^{いしまる ゆうと}さんは、「願うだけでは、平和はおとずれません。」とし、私たちにもできる平和への一歩として、「一人一人が相手の話をよく聞くこと」、「『違い』を『良さ』と捉え、自分の考えを見直すこと」、「仲間と協力し、一つのことを成し遂げること」と、「平和への誓い」を読み上げました。(総務課)

令和6年度「ヒロシマ青少年平和の集い」

平和記念式典に派遣された各都市の平和使節団等(中学生が中心)が集まり平和学習を行う「ヒロシマ青少年平和の集い(平和学習の集い)」を、今年度は拡大し、8月5日(月)および7日(水)の2回開催しました。17団体172人の参加を得、広島の中・高校生ピースクラブ延べ70人と交流しました。

集いは、①被爆の実相に関する平和学習と、②グループ討議による平和学習の二つから構成されます。

①では、クラブのメンバーから原爆被害概要を説明した後、5日は山瀬潤子^{やま せ じゆん こ}さん、7日は八幡照子^{やはた てる こ}さんが被爆体験講話を行いました。

②では、「あなたの地元では、どんな戦争を経験して、それをどう伝えたいですか」、「核兵器をなくすために自分たちは何ができますか」という二つのテーマの下で、活発な意見交換が行われ、それぞれの討議結果が発表されました。



グループ討議の様子

参加者アンケートによると、被爆体験講話は99%、グループ討議は95%から、よかったとの回答をいただいています。

また、「平和は当たり前でなく、その大切さがわかった。」との回答も89%に上っており、この集いの意義が示されました。

さらに、子どもたちからは、以下のような意見が寄せられています。

- いろいろな地域の生徒と話し合ったり、被爆者の方の話を聞いて、平和についてとても考えることができ、一番印象に残った時間となった。
- 被爆者の方の実際の体験を詳しく教えてもらい、本当に原爆は沢山の人の心を傷つける悲しいものだというのを改めて理解することができた。
- 同年代の様々な地域から来た生徒とのグループ討議で、新しい知識や考え方を得ることができ、楽しかった。
- 今の当たり前が当たり前でなかった時代を知り、ほんの少しでもいいので、これからも平和について何ができるのか考えていきたいと思った。
- 子どもは大人と比べたら何かを変える力がとても小さいが、今回の集いで、それでも平和のために行動したい若い人が沢山いるのだと知って、勇気づけられた。

我々市民社会は、諸課題に現実的に対応していくことは勿論ですが、根底には、日本国憲法に掲げられた平和への理想を持ち続けていくことが重要であると思います。各地域で大きな役割を果たしてこられた戦争経験者や被爆者の皆さんが非常に高齢となる中、若い世代の平和意識を高めていくために、各自治体が連帯して平和学習を進めていく必要があります。

被爆地広島としても、被爆80周年となる来年度、8月5日・6日・7日の各日、この「平和学習の集い」を拡大開催します。今の若い世代は、被爆者の皆さんの話を直接聴くことができる最後の世代ですので、極めて貴重な機会になります。また、各自治体に参加しやすいよう、来年度、広島市は、国の財政支援を受けて、各自治体の子どもたちの派遣経費に対する補助制度を創設することを検討しています。

自治体の皆様におかれましては、是非、来年度子どもたちを広島に派遣し、「平和学習の集い」に参加いただくことを、心よりお願い申し上げます。

(平和記念資料館 啓発課)

令和6年度「ひろしま子ども平和の集い」

8月6日、「ひろしま子ども平和の集い（平和文化活動の集い）」を開催しました。この集いは、平和記念式典参列のために広島に派遣された子どもたちと広島の子供たちが一堂に会し、被爆体験を学ぶとともに、平和文化活動に取り組む生徒たちが平和への思いや取組を発表するものです。北は北海道、南は沖縄県まで、日本全国の約50の自治体から1,200人が集まりました。

第一部の「被爆体験を学ぼう」では、最初に、梶本

淑子さんが被爆体験講話を行いました。続いて、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティアによる被爆体験記の朗読を聴いた後、参加者全員で、原爆詩「げんしばくだん」を声に出して朗読しました。

第二部の「平和のバトンをつないでいこう」では、広島内外の9団体が発表を行いました。ユースピースボランティアの被爆地での英語のガイド活動、広島市立己斐中学校生徒



広島市立己斐中学校のいじめ防止の取組の発表

会の「いじめ防止宣言」、市原市（千葉県）や石垣市（沖縄県）の平和大使の活動報告など、各地の中・高校生が、平和な世界の実現に向けた自分たちの充実した取組やメッセージの発表を行いました。

参加者アンケートによると、被爆体験講話は94%、原爆詩の朗読は89%、平和の取組発表は84%から、よかったとの回答をいただいています。

また、「平和は当たり前でなく、その大切さがわかった。」との回答も82%に上っており、この集いの意義が示されました。

さらに、子どもたちからは、以下のような意見が寄せられています。

- 全国から来た子どもが、平和について学び、考える機会で、とても良かった。これからの世界を担う世代が、平和を意識し、取り組めれば素晴らしいと思った。
- 被爆者のお話を聞いて、戦争の悲惨さが鮮明に思い浮かんだ。聞いているだけでも耳をふさぎたいことだが、これが現実だということを、とても悲しく思った。この事実を沢山のの人に伝えなければと強く思った。
- 専門家の原爆詩の朗読は、とても感情が投入される。また、一緒に読み上げることで、詩に込められた思いが伝わるのが分かった。
- 様々な地域・学校の生徒が集まって、こうした活動を行うことで、平和への思いを同じくし、平和が広がっていくんじゃないかなと感じた。このようなプロジェクトは、いつまでも続いて行われればいいと思う。

この「平和文化活動の集い」は、全国の子供たちが集まって、平和への思いを分かち合い、日々の実践につなげていく重要な契機となると考えています。被爆80周年となる来年度、先ほどの「平和学習の集い」と同様、さらに内容の充実を図っていきたいと考えております。

自治体の皆様には、是非、「平和文化活動の集い」にもご参加いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

(平和市民連帯課)

第11回NPT再検討会議第2回準備委員会 に平和首長会議代表団を派遣

平和首長会議は、スイス・ジュネーブ市で開催された第11回NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議第2回準備委員会へ松井一實^{まつい かずみ}会長（広島市長）、鈴木史朗^{すずき しろう}副会長（長崎市長）、香川剛廣^{かがわただひろ}事務総長（本財団理事長）、谷史郎^{たにしろう}本財団副理事長等の代表団を派遣しました。

会議を巡っては、国際情勢が緊迫化する中、核軍縮の進展が現実には厳しい状況に置かれており、それに対して、さらに人道イニシアティブを進めていく必要性など、促進のための次を見据えた議論が行われ始めていることも確認できました。

また、今回、国連、日本政府代表、核兵器保有国代表に加え、核兵器禁止条約（TPNW）推進国代表、国際平和NGO関係者等とも直接お会いし、様々な意見交換をすることができました。その中で、本財団がこのような関係諸機関と連携し、国際社会の一員として、被爆の実相を根底に据えつつ、国際的な人道イニシアティブの発展・普及への貢献を念頭に、国際会議等でのアピール活動と、平和首長会議や広島平和記念資料館等を通じた平和学習などのアウトリーチ活動を進めていく重要性を、改めて認識することができました。

NGOセッションでのスピーチ

松井会長は、「核兵器の使用が人類を滅亡へと導くことを明確に示している広島・長崎の被爆体験は、核兵器廃絶の根拠となるべきものである。」「我々は、核兵器は『断じて使ってはいけない兵器』であると訴え続けてきたにも関わらず、現下の国際情勢では、核兵器が『条件次第で使える兵器』へと評価が変わっていることを極めて遺憾である。」としました。その上で、「広島平和記念資料館の訪問者数が過去最多となったことは、国際情勢に対する警戒感の高まりが、多くの人々に核兵器使用がもたらす壊滅的な人道的結果を再確認させようとしているということだ。」と指摘しました。そして、為政者に対し、「平和を愛する市民社会の声を踏まえ、核戦力強化や軍拡競争を肯定的に捉えることを直ちに直視し、対話による外交努力をもって、核軍縮・不拡散措置を確実に進展させる。」よう訴えました。続いて鈴木副会長は、核兵器を使用したら人やまちに何をもちたすのか伝えた上で、核兵器国をはじめとした各国に、「核兵器は絶対に使ってはならない。人類が核兵器のリスクから免れるための唯一



NGOセッションでの松井会長と鈴木副会長

の手段は『廃絶』しかないのだ。」と訴えるとともに、人類共通の願いとして「長崎を最後の戦争被爆地に」という言葉で、スピーチを締めました。

このように、被爆地の両市長は、会議の場で、被爆の実相を踏まえた核兵器の非人道性について、核軍縮を進める上での最も重要な基盤となる事実として、各国政府に強く訴えました。

国連関係者との面談等

国連欧州本部事務局長、国連訓練調査研究所（UNITAR）総代表、国連軍縮研究所（UNIDIR）所長と面談し、平和首長会議との今後の協力体制等について、意見交換を行いました。国連欧州本部では、現在ジュネーブの本部で行われている広島・長崎の被爆に関する展示を今後如何に発展させていくかということにも話が及びました。

また、UNIDIRと日本政府代表部が共催したドキュメンタリー映画「Paper Lanterns^{*}（邦題：灯籠流し）」上映会で、松井会長が開会挨拶を行い、「未来の世代が、この映画に登場する人々が経験したような悲惨な歴史を繰り返さないよう心から願っている。」と述べました。

この映画は、各国国民間の相互理解の素晴らしさを表現しており、国際的に被爆の実相を広めていくうえでも、市民間・国民間の相互理解が重要なかぎになることが改めて認識されました。

※広島への原爆投下で犠牲となった12名の米兵捕虜の身元を、40年以上にわたり捜索してきた森重昭^{もりしげあき}氏の活動を追ったドキュメンタリー映画

核保有国との面談

核保有国であるフランス及び米国の代表者に対し、両国にも加盟都市があるなど、世界中で、核兵器廃絶を求め、平和を愛する市民社会の輪が広がっていることを紹介し、市民社会の声を踏まえ、対話による外交努力を行い、誠実に核軍縮交渉を行ってほしいと要請するとともに、平和首長会議の取組への協力を依頼しました。また、各国が考える核軍縮に向けたアプローチ等について、意見交換を行いました。

核兵器禁止条約推進国との面談

タイ、アイルランド、メキシコの各国代表者及びカザフスタンの政府代表でもある第2回準備委員会議長と面談し、各国の核兵器禁止条約推進に向けた尽力に敬意を表するとともに、核兵器禁止条約の早期締結を願う平和首長会議の取組への理解と協力を求めました。

タイのウサナ・ベラナンダ大使は、核兵器禁止条約の設立メンバー国の一つとして、TPNWとNPTとの補完性について推進しており、平和首長会議のような世界的な組織と協力していきたいと述べるとともに、広島・長崎の被爆体験は、まさに具体的な核兵器使用の人道的結果を示すものだと明言されました。なお、会期中、タイとアイルランドは核兵器使用の人道的結

果等について議論するサイドイベントを共催し、アイルランドのノエル・ホワイト大使は、NPTでも専門家を呼んで、核兵器使用の人道的结果について議論すべきだと発言されました。

国際平和NGO関係者等との面談

ICAN、全米軍備管理協会（ACA）、核軍縮・不拡散議員連盟（PNND）、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）、マーシャル教育研究所、核時代平和財団（NAPF）の関係者と面談し、来年の被爆80周年に向けて、世界各地で原爆・平和ポスター展等を開催できないかと考えていることや、特に若い世代への平和学習を進めていく方針等を説明し、例えば、ポスター展を行う国において関連するNGOに協力してもらうなど、平和首長会議への支援を呼び掛け、今後一層の連携を図ることで意見の一致を見ました。

平和首長会議ユースの活動

今回の準備委員会には、次代の平和活動を担う青少年として、広島県内の高校生8名を「平和首長会議ユース」として派遣し、中満泉国連事務次長兼軍縮担当上級代表に対して、約4万4千筆分の「『核兵器禁止条約』の早期締結を求める署名」の目録を手交しました。

同準備委員会のサイドイベントとして開催した「平和首長会議ユースフォーラム」では、平和首長会議ユースや世界各地の若者8組が、平和活動の取組を発表するとともに、ディスカッションを行いました。参加したユースからは、「様々な立場で多様な活動を行う同



中満国連事務次長(後列中央)と高校生

世代の仲間を知る良い機会になった。」「従来の枠組みに捉われることなく、様々な視点から核兵器廃絶を働きかける重要性を改めて認識した。」との感想がありました。最後に、中満事務次長から、「これからの未来を良くするための意思決定にユースが常に参加すべきである。ここにいる皆さんが引き続き平和活動を発展させていってほしい。」との言葉をいただきました。

市川とみ子軍縮会議日本政府常駐代表との面会では、「被爆の実相を自分の目で見て心で感じ、それを自分の言葉で、多くの人に伝えていってほしい。」との言葉をいただきました。

ゴズィ・オコンジョ＝イウェアラ世界貿易機関（WTO）事務局長との面会では、「WTOは、貿易の制度を通じて、世界を平和で持続可能性な場所にするこ

世界で最も有名な女性リーダーの一人である同氏から、丁寧なご回答と、若い世代への激励をいただきました。（平和首長会議運営課）

平和首長会議インターンシップを実施

本インターンシップは、国内外の加盟都市の若手職員等を広島に招へいし、被爆の実相を深く理解していただくとともに、終了後、それぞれの都市において、事務局や他都市との連携を強化しつつ、平和に向けた取組を推進してもらうことを目的としています。

6月19日から7月3日までの2週間、平和首長会議理事都市のサラエボ市（ボスニア・ヘルツェゴビナ）のハルン・パシックさん及びタスマン市（ニュージーランド）のユリア・パンフィロヴァさんに受講いただきました。



被爆体験証言者の小倉桂子さん(中)とインターン2人

インターンシップを終えて、それぞれ次のような決意を持って帰国されました。

パシックさん：1990年代のボスニア・ヘルツェゴビナ紛争では、大規模な都市破壊と多くの市民等の殺害が生じました。人道の問題が大きく問われ、その傷跡が今も残っています。サラエボ市は、広島と同じく、戦争の悲劇を経験し平和を求める都市として、自国やバルカン地域に平和首長会議の取組を広めます。

パンフィロヴァさん：平和首長会議が実施する「子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト」への参加の呼びかけを、学校だけでなく他の団体にも広げ、平和について学び考える機会をより多くの子どもたちに提供します。また、タスマンの人々が被爆者の体験を聞く機会を設けたいです。（平和首長会議運営課）

令和6年度ユースピースボランティアの活動

平和記念公園を訪れる外国人に被爆の実相を英語で伝えるユースピースボランティアは、年々その活動規模を拡大し、これまでで最多の133名が活動を行っています。

現時点までの活動としては、平和記念公園を訪れた観光客のほか、平和記念式典参列のために来広した各国の大使・国際機関の代表者や、平和学習に訪れる海外の大学生へのガイドを行いました。

ガイドを受けた方からは、「実際に原爆ドームや平和記念公園の慰霊碑等のガイドを受け、その場の感覚を肌で感じ、考え方が変わった。」「ガイドを受けなが

ら、平和について意見を交わし、交流したことに意味があった。この交流が平和につながっていくと思う。」などのコメントをいただいています。



外国人観光客にガイドを行うユースピースボランティア

一方、こうした活動は広島子どもたちにとっても、平和学習として大きな意義を持ちますので、子どもたちが継続して活動に取り組むことができ、それが平和に関する人材育成につながっていくよう、さらにユースピースボランティアの充実を図っていききたいと考えています。

(平和市民連帯課)

「原爆の絵」16点が新たに完成 高校生たちが被爆体験を絵に描く

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、被爆者と同校生徒が協働し、被爆者の被爆時の記憶に残る光景を絵に描き、当時の状況を伝える「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

昨年10月から7人の被爆体験証言者と16人の生徒が制作を進め、このたび16点の絵が完成しました。これで平成19年度（2007年度）に同校に制作を依頼して以来、170人を超える生徒の協力を得て、計207点もの貴重な絵を制作していただきました。

このうち、証言者の迫田勲さんと、持田杏樹さん（3年生）は、“突然降り始めた「黒い雨」にはしゃぐ子供たち～それが放射線物質を含んだ危険な雨とは知らず～”という作品を制作しました。



“突然降り始めた「黒い雨」にはしゃぐ子供たち
～それが放射線物質を含んだ危険な雨とは知らず～”
制作：持田杏樹(基町高等学校)、迫田勲(被爆体験証言者)

迫田さんは7歳のとき、爆心地から北西に約19km離れた、現在の広島市安佐北区安佐町の山中で、突然降ってきた放射性物質を含む大粒の黒い雨に打たれました。絵は、迫田さんや他の子どもたちが、それが危険な雨だと知らず、はしゃいでいたり、不思議だなと見ていた様子を描いたものです。迫田さんは、「私の記憶の

中にある事を、持田さんが目に見える形にしてくれた。この絵を多くの人に見ていただき、原爆の威力、恐ろしさを感じていただきたい。」などの感想を述べておられます。

今回が2回目の制作となる持田さんは、「この過ちが二度と繰り返されないためには、ただ8月6日に起きたことを考えるだけではなく、それが今この時点までどれだけ大きな影響を与えたかをしっかり考えることが重要だと思います。2回目の制作だからこそ気づけた事を、今後自分の言葉で伝えていきたい。」と述べておられます。

証言者と生徒のこうした努力により完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者による被爆体験講話での活用のほか、絵の貸出や、市民や報道関係者等への画像データの提供なども行い、原爆被害の実相を後世に継承するため、今後も役立てていきます。（平和記念資料館 啓発課）

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館・ 広島平和記念資料館 共同特別展 「広島市の救護に立て」 暁部隊最後の任務

多くの来館者がある8月に、混雑対策の一環として、平和記念資料館所蔵の関連資料を原爆死没者追悼平和祈念館に展示する共同特別展を開催しました。これは、同祈念館の企画展「あかつき とうか 暁部隊 劫火へ向かへりー特攻少年兵たちのヒロシマー」と連動するものです。

戦闘に備え訓練に明け暮れていた暁部隊に与えられた最後の任務は、被爆により焼け野原になった広島で苦しむ人々を救うことでした。闘う相手は、負傷者や遺体の無残な光景と凄まじい臭気でした。

彼らは最も早い時期の入市被爆者であり、暁部隊が広島で目撃した原爆被害の悲惨さを通じて、核兵器の非人道性を訴えました。

一か月の開催期間中、16,295人の方の

来場をいただきました。見学者からは、「暁部隊の活動に感銘を受け、被爆後の救護や復興についてもっと知りたいと思った。」「リアルな物語に触れ、多くの市民が犠牲となったことに改めて怒りが湧いた。」「永遠に語り継ぐべき内容である。」等の感想が寄せられています。

<展示構成>

- ・8月6日の混乱
- ・総力を挙げて
- ・闘いの果て

<展示資料>

- ・写真 28点
- ・市民が描いた原爆の絵 15点
- ・実物資料等 25点

(平和記念資料館 学芸課)



会場風景：中央のテーブルで元暁部隊員の体験記を紹介しました。

広島平和記念資料館 令和6年度第1回企画展 新着資料展 —令和4年度寄贈資料—

期間 令和6年9月13日(金)～令和7年2月25日(火)
場所 平和記念資料館東館1階 企画展示室

この企画展では、令和4年度に被爆者や遺族の方々から寄贈された955点の被爆に関連した資料の中から、134点を紹介しています。

写真①の「原爆の絵」は、被爆時おごきんの13歳だった尾崎稔さんが90歳の時に描いた絵です。顔に火傷を負い収容された救護所で手当てを受ける様子を描いています。



(写真①) 火傷を負い救護所で手当てを受ける尾崎稔さん(尾崎稔作)

その中で、治療にあたってくれた兵士との出会いを「生死を決めた事として決して忘れることはない」との感謝の言葉も記しています。

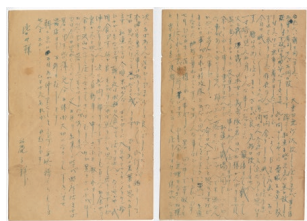
写真②は、当時3歳の久保昭二さんの衣服です。



(写真②) 原爆で亡くなった久保昭二さん(当時3歳)の衣服
(久保朋行寄贈/資料撮影:土田ヒロミ)

郵便局で働いていた当時17歳の清水麗子さんが父親に送った手紙です。麗子さんの遺品や遺骨は見つかっていません。手紙には、「私達も戦場と同じいづどんな事があるか分かりません。頭の上に落ちたらいっぺんです。」と書かれています。

このような資料を前に当時の人々の声に向き合い、「もう二度と繰り返してはならない」との思いを心に刻んでいただければと思います。



(写真③) 原爆で亡くなった清水麗子さん(当時17歳)が父親に宛てた手紙
(清水貞之寄贈)

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
TEL (082) 241-4004



資料館 HP

国際交流員が着任しました

国際市民交流課に、8月5日付で新たに国際交流員が着任しました。国際交流員は、小学校等での国際理解学習の授業や、市民との対話事業などを担当し、地域の国際化の推進に取り組みます。

【着任あいさつ】

初めまして。ウォールガー・ダニエルと申します。

イギリスのイングランドのサウンプトン出身です。今年8月に来広しました。横浜市と長崎市にも住んだことがあります。大学生の頃は日本学を勉強し、翻訳修士も取得しました。



ウォールガー・ダニエル
国際交流員

学校訪問等を通じてイギリスの文化や歴史を紹介したいです。同時に、私はもっと深く日本と広島市の文化・伝統・歴史等をわかるようになりたいと思います。子どもの頃から日本に深い興味を持ってきましたので、自国のことについて一方的に教えるだけではなく、相手からも学び、本当の文化の交流に参加するつもりで取り組みたいと思います。

仕事以外でも、日本の食文化から美しい景色、深い歴史まで出来るだけ体験したいです。まずは広島市周辺の観光地を見に行きます。特に厳島神社と、世界中で知られているあの鳥居を！そして島根県にある、古事記に登場する黄泉比良坂といわれるところも行ってみたいです。

(国際市民交流課)

ヒロシマ・メッセンジャーを募集します！

広島市では、海外の6都市と姉妹・友好都市提携を結んでいます。これらの都市を広く市民に紹介して身近に感じてもらい、都市同士の友好の持つ意味を深く理解してもらうため、交流の推進役となる「ヒロシマ・メッセンジャー」を募集します。

【活動内容】

- ◆「姉妹・友好都市の日」記念イベントの企画運営への参画、司会進行
- ◆広島市等が行う国際交流・協力に関する行事への参加
- ◆学校・公民館等での姉妹・友好都市の広報活動など

【募集要件及び申込方法】

募集要件及び申込書を国際市民交流課ホームページからご確認いただき、10月31日(木)までに申込書を提出してください。

ご応募お待ちしております！

【応募先】

〒730-0811

広島市中区中島町1番5号 広島国際会議場3階
(公財) 広島平和文化センター 国際市民交流課
「ヒロシマ・メッセンジャー」係

TEL (082) 242-8879 / Fax (082) 242-7452

E-mail internat@pcf.city.hiroshima.jp



メッセンジャー
募集ページ